

甲状腺外科草子 29

大観衆の熱気の中で

杉野 圭三

世の中には 2 種類の人があります。大舞台で平常の実力を発揮できる人と、人前では委縮し実力を発揮できない人です。しかし、稀に観衆が多いほど実力以上の能力を発揮できる人もいます。人の集団には目に見えないパワーがあり、理性、判断力、行動に大きな影響を与えます。

1. 長嶋茂雄と野村克也

長嶋茂雄（1936-）は、天覧試合をはじめ、ここ一番という場面で強打を打ち、チャンスに強く、守備でも好プレーを演出し観客を魅了しました。

野村克也（1935-2020）は南海ホークスの黄金時代を築き、三冠王も獲得、監督としても傑出した業績を残しました。しかし、パリーグが不人気なため巨人のような脚光を浴びることはありませんでした。



長嶋茂雄

野村克也

「王、長嶋がヒマワリならオレは月見草」と自虐するのも分かります。

長嶋は観衆の声援が大きければ大きいほど、力を発揮するタイプです。当時に無観客試合があったなら、その成績は如何ばかりだったでしょうか。あの長嶋スタイルの攻守が発揮できたでしょうか？

一方、野村であれば無観客でも淡々と平常どおりの仕事をこなしたのではないのでしょうか？実は、我が家は父の影響で

代々南海ホークスファンでした。日本一を制覇した 1964 年、小学生だった私は父と球場に行ったことがあります。

当時、杉浦や広瀬などの名選手も絶好調でしたが、球場はガラガラで閑古鳥が鳴く状況でした。その時の野村のバッティングや強肩は今でも強く印象に残っています。

ちなみに、長嶋の成績は通算安打 2471、本塁打 444、打率 3 割 5 厘、打点 1522、対する野村は通算安打 2901、本塁打 657、打率 2 割 7 分 7 厘、打点 1988 です。

野村克也は「人生の最大の敵、それは鈍感である」という名言を残しています。

2. 寅さんと文珍

映画や落語は、実際に映画館や寄席に行かないと面白さが十分に伝わりません。

「男はつらいよ（1969）」を初めて映画館で観た時、満員の客席は抱腹絶倒、大爆笑の渦でした。渥美清の演じる寅さんと周りの役者（太宰久雄、森川信、佐藤蛾次郎）たちとの「間」の面白さはテレビでは伝わりにくく、映画館のような笑いの連鎖による盛り上がりはありません。



男はつらいよ第一作 懐かしのヤングオーオー

落語も同様で、テレビで見るのと実際に聴くのでは大違いです。数多い落語家の中でも、桂文珍の話芸は突出しておりヤングタウン、ヤングオーオー時代（分からない世代も多いかも？）からのファンです。ここ数年、広島での独演会には夫婦で必ず足を運んでいます。序盤の「枕」から客の心を取り込み、本番まで

徐々に盛り上げていく話術はさすがプロです。観客がいなければ、この笑いによる熱気と盛り上がりは不可能でしょう。

3. チャーチルとケネディ

政治家の中にも、チャーチルやケネディのように観衆が多いほど実力を発揮する人がいます。

ウィンストン・チャーチル(1874-1965)は敵も味方も多く、何度も挫折と成功を経験しました。しかし、敵に攻撃されればされるほど果敢に反撃し、観衆を味方に引き入れ、優勢に転じさせる卓越した政治手腕を持っていました。「危機における英雄」と評価されるのも納得です。チャーチルには枚挙にいとまがないほど多数の名言、歴史に残る名演説、ウィットに溢れた会話、エピソードなどがあり、ノーベル文学賞受賞作を含む多数の著書もあります。



1953年ノーベル文学賞受賞

「金を失うのは小さく、名誉を失うのは大きい。しかし、勇気を失うことはすべてを失う」というのは、好きな一句です。

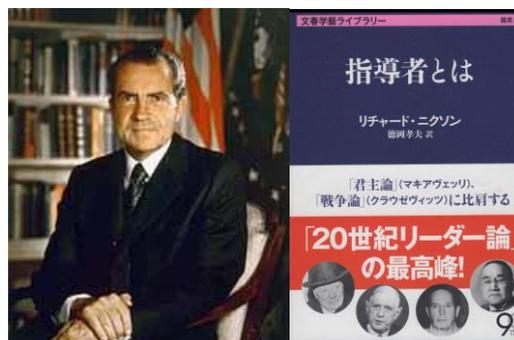


チャーチルのVサイン

ケネディ

ジョン・F・ケネディ(1917-1963)は当時の若者たちの熱狂的支持を受け、第35代大統領に選出されました。選挙戦での演出や演説原稿の出来栄、マスコミ対策などで観衆を味方につけ、リチャード・ニクソン(1913-1994)に優位に立ったのが要因(その他巷間で言われている不正選挙の要因は割愛)とされます。

ニクソンショックやウオーターゲート事件などから不人気なニクソンですが、個人的には人格、政治姿勢、知性などから政治家としても高く評価しています。ニクソンの著書「指導者とは」(文春学藝ライブラリー)は名著です。



ニクソン

「指導者とは」

最後にコロナ禍が延々として続く中、チャーチルの言葉で筆を擱きます。

『現在我々は悪い時期を通過している。事態は良くなるまでに、おそらく現在より悪くなるだろう。しかし我々が忍耐し、我慢さえすれば、やがて良くなることを私は全く疑わない』

(広大市医師会だより、令和2(2020)年9月号、特集「無観客試合の楽しみ方」に投稿した随筆を改訂しました)

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2022年5月12日